

第七章 日支通商條約の締結

第一節 清廷の慎重

日本公使林董の來任は遼東半島に關する善後商議を除けば其最大任務は馬關條約第六條に基く日支通商條約の商訂であつた。林公使天津に到着するや清廷は光緒二十一年五月十日附を以て李鴻章、王文韶を全權大臣に任命し日本公使との交渉に當らしめた。清廷は此事が國計民生に關係する處甚大なるに鑑み特に六月十六日李鴻章王文韶に對し遷延することなき様上諭を下した。上諭に曰く

日清新條約第六條ハ現ニ將ニ議開カレントス、此事國家ノ稅釐華民ノ生計ニ於テ大ニ妨礙アリ惟約款ヲ藉リテ詳明ニセハ尙以テ補救ニ資スルニ足ル前ニ特ニ李鴻章王文韶ヲ全權大臣ニ任命シ專ラ條約商議ヲ司ラシム、該大臣等必ス先ツ定見ヲ持シ議ヲ開ク時方ニカヲ盡シテ與ニ磋商スヘシ。新約内ニ航海條約及陸路通商章程ノ訂結ハ應ニ清國ト泰西各國間ノ現行約章ヲ本トナスヘシノ語アリ、即チ當ニ此ノ語ヲ憑ト爲シ堅執スヘク今次許ス處ノ利益ハ皆泰西各國トノ章程ノ外ニ溢出セシメサレハ我利權ヲ保ツニ庶カルヘシ。諒フニ該大臣已ニ議

スヘキ各條ハ熟思審處セル所ナラム。李鴻章ハ原新約ヲ定ムルノ人ニシテ尤モ發慮スヘシ、勉メテ補救ヲ圖リ一分ヲ爭ヒ得ハ即チ一分ノ益アルヲ期セヨ、其如何ナル方法ニ依リ狡謀ヲ杜クヤハ即チ先ツ妥議覆奏セヨ。前ニ江浙川鄂各督撫ニ諭シ豫メ善策ヲ籌ラシメタルニ廖壽豐、譚澗洵、鹿傳霖ヨリ前後電奏アリ、又總理衙門ノ各章京（註 清朝ノ官名）ニ代リテ陳述セル處アリ、均ク剴切詳明深中竅要ニ屬ス。李鴻章等指ス所ノ各條ニ照シ悉心籌畫辦法ヲ商定シ以テ辯論ノ地歩ト爲セ。之ヲ總スルニ此次ノ條約商議ハ國計民生ニ關繫スル甚タ鉅ナリ該大臣等國ノ厚恩ヲ受ケ身ハ重任ヲ膺ス慎テ含混遷就シテ後患ヲ貽スヲ致スコト勿レ。是至要ト爲ス（光緒條約第四十三卷一頁參照）

第二節 日本側提出の條約草案

林董は旋て入京謁見を了し、李鴻章も七月九日宮中に召され交渉開始の命を受け北京に於て會議を繼續した。日本側提出の條約草案は左の四十ヶ條より成り實に不平等條約の標本と云ふべきものであつた。

第一條 大日本國皇帝陛下ト大清國皇帝陛下トノ間並ニ兩國臣民ノ間ニ永遠無窮ノ平和及親睦アルヘシ

第二條 大日本國皇帝陛下ハ便宜ニ從ヒ其外交官ヲ清國北京ニ駐劄セシムヘシ大清國皇帝陛下モ亦便宜ニ從ヒ

其外交官ヲ日本東京ニ駐劄セシムヘシ